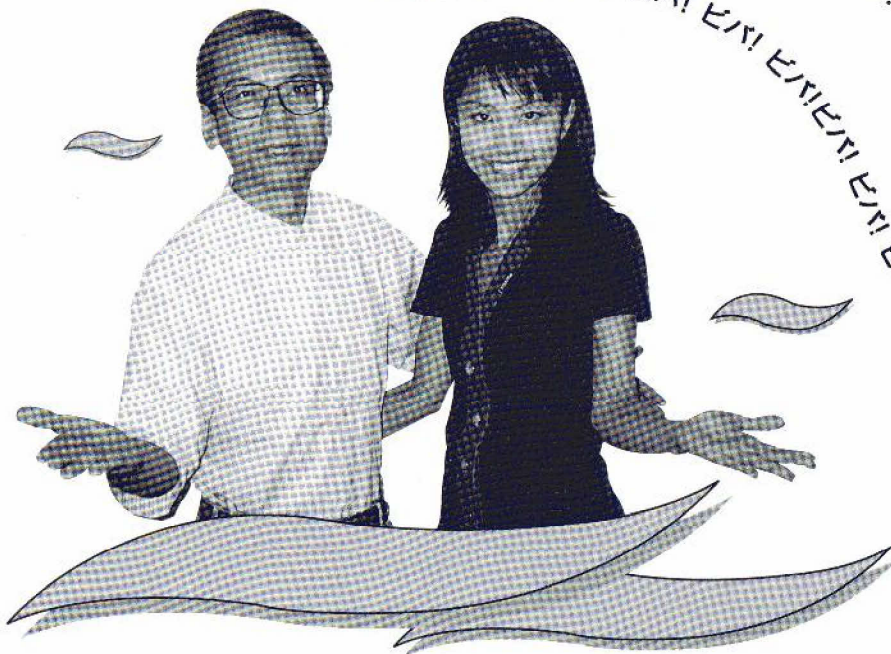


RKK熊本放送

時代! 時代! 時代! 時代! 時代! 時代! 時代! 時代! 時代! 時代!  
時代! 時代! 時代! 時代! 時代! 時代! 時代! 時代! 時代! 時代!  
時代! 時代! 時代! 時代! 時代! 時代! 時代! 時代! 時代! 時代!



時代の波に  
漕ぎ出そう。――。

ニュースな気分



土曜あさ9時30分  
出演/江越哲也・野溝美子

第39回  
熊本県芸術祭参加

ベートーヴェン  
第九  
第15回

平成9年12月21日(日)午後6時30分  
熊本県立劇場コンサートホール  
主催/熊本県民第九の会・熊本県文化協会  
助成/熊本県・(財)熊本県立劇場





熊本県知事  
福島 護 二

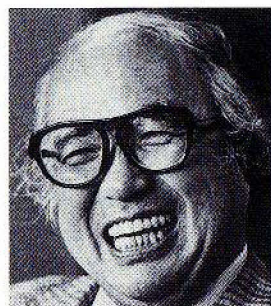
祝 辞

第15回ベートーヴェン「第九」演奏会の開催を心からお喜び申し上げます。

「第九」演奏会は、今では1年を締めくくる熊本の恒例行事として定着し、多くの県民の皆様が毎年心待ちにしておられます。昭和57年の初演以来今日まで、この演奏会を育ててこられた第九の会の皆様の御熱意と御努力に対し、深く敬意を表します。

この演奏会に御出演の皆様は、忙しい仕事の合間をぬって、それこそ夏の暑い時期から練習に励まれて、今日の本番に臨んでおられます。こうした皆様方の音楽に対する情熱こそが、地域の文化を支える大きな力であり、県総合計画にも掲げております熊本ならではの新しい文化の創造の一翼を担うものだと考えております。本日御出演の皆様には、今後ともこのような「第九」の演奏会などを通して本県文化の振興に御尽力くださるようお願いいたします。

本日は、日頃の練習の成果をいかに発揮され、歓喜の旋律がコンサートホールいっぱい響くことを期待しております。本日の御盛会を心より御祈念申し上げます。



熊本県立劇場館長  
鈴木 健 二

ベートーヴェンと「こころコンサート」

今日からさか上っておよそ半年前の六月十五日、この熊本県立劇場コンサートホールの舞台では、第2回「こころコンサート」が開催され、4000名を超える方達による大合唱の歌声が響いたのでした。その中に1666名のハンディを持つ方達の一生懸命な姿があり、すべての人はみな同じであり、誰にも素晴らしい才能がある事実を知らせました。

ベートーヴェンもまた「第九交響曲」を創作した頃には、完全に聴覚を失っていました。いくら天才とはいえ、純粋な音は彼の耳を通して脳には伝わっていなかったであろうと思われま。そうだとすると、「第九」を現代に至るまで～たぶん未来までも～世界中のあらゆる人に親しまれる名曲とした原因は、彼の「こころ」がこの曲を完成せしめたのではないかと私は推察するのです。

今夜も歓喜のコラスが遥かなる天空の神にまで届きますが、「こころコンサート」に続く今年2度目の感動になると期待しています。



熊本県文化協会会長  
三 浦 洋 一

ご 挨拶

県民第九の会の第15回公演を心からお慶び申し上げます。

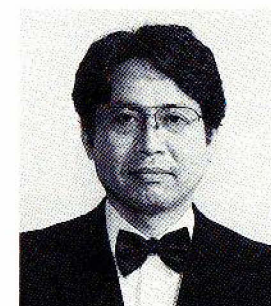
ここ数年、県内で発表される公演、行事は県民文化祭、芸術祭まで含めると300を越えるようになりましたが、県民第九の会の公演は毎年その棹尾を飾ってきました。

私はいつも不思議に思うのですが、日本人ほど沢山の種類の曲を歌う民族は珍しいのではないのでしょうか。欧米の歌はもとより今の日本のさまざまな唄、民謡、吟詠、朗詠、邦楽など驚くほどのレパートリーがあります。

レパートリーは戦前と戦後では一変したと思いましたが、近頃は再び戦前の唄も歌われるようになってきました。日本人は音楽については美術以上に許容量の大きい民族かも知れません。

ベートーヴェンの第九も私どもの心の琴線をかきならしてくれます。近年は予測もできない事件や不祥事が多すぎます。第九は暗くて重苦しいものまで押し流すだけの力をもった強い、明るい曲です。

歳末の熊本の人たちを鼓舞して頂く県民第九の会の公演のご盛況を心から祈念いたします。



熊本県民第九の会実行委員長  
林 原 隆 治

ご 挨拶

ご来場、誠に有難うございます。今年も「第九」演奏会を開催できます事を、心より御礼申し上げます。

特に今回は第15回という節目を迎え、本演奏会継続の為に、献身的にご尽力下さいました有馬俊一先生並びに下田宰城先生のご苦勞を改めて思い起こしております。また、第1回を指揮して頂いた山田一雄先生、独唱者として8回もご出演頂いた木村宏子先生はすでに故人となられ、これまでの長い年月を実感致します。

さて、今回は指揮者に、熊本の第九でお馴染みの金洪才氏、そしてソリストには本県在住の志岐さんをはじめ中央でご活躍の方々をお願いする事が出来ました。公募による合唱団員とアメリカ公演で意気あがる熊本交響楽団も、例年以上にこの記念すべき第九に情熱を燃やしております。演奏が、真摯で、そして詩人シラーが「時の流れが厳しく切り離れた人々を歓喜はひとつにする」と書いた詩に共感しつつ為される事を切に願います。

末筆になりましたが、本公演に際し、熊本県及び熊本県立劇場の助成、熊本県文化協会の共催を頂きました事を深く御礼申し上げます。



指揮 金 洪 才  
独 唱 ソプラノ 志 岐 由理子  
アルト 妻 鳥 純 子  
テノール 牧 川 修 一  
バリトン 小 川 裕 二

合 唱 熊本県民第九の会合唱団

合唱指揮 林 原 隆 治  
工 藤 勇 壹  
松 岡 聡  
ピアノ 古 閑 恵 美  
眞 田 眞 澄  
浜 田 志 貴

管 弦 楽 熊 本 交 響 楽 団



平成8年12月23日(月)《第14回熊本県民第九の会演奏会(指揮=本名 徹二)》から



指揮 金 洪 才 (キム・ホンジェ)

1954年生まれ。桐朋学園大学で指揮を小澤征爾、秋山和慶、森正の各氏に師事。  
1978年3月、東京シティ・フィルの特別演奏会でデビュー。  
1978年9月、第14回東京国際指揮コンクールにて第2位と、初めての特別賞(斎藤秀雄賞)を受賞。  
1980年6月、テレビ番組「オーケストラがやってきた」(演奏・新日本フィル他)の専属指揮者に選ばれ、1981年1月にNTV「私の音楽会」の専属指揮者として読売日本交響楽団も指揮している。  
1981年4月、東京シティ・フィルの指揮者就任。  
1984年4月、名古屋フィルハーモニー交響楽団、1987年4月京都市交響楽団の指揮者を歴任の傍ら全国主要オーケストラを客演指揮し、内外の著名なソリストとも共演して、その優れた音楽性と鮮やかな指揮は好評を博してきた。  
1989年よりベルリンにおいて著名な作曲家ユン・イサン氏の下で研鑽を積む。  
1991年、帰国後ユン・イサン氏の作品(新日フィル、東響、京響、他)交響曲第2番、第3番を始め数多くの管弦楽作品を日本初演し、成功をおさめる。  
特に1992年11月東京芸術劇場での交響曲第3番(新日フィル)は、NHK教育テレビでも放映され絶賛を博した。ユン・イサン氏はインタビューで、彼の指揮について「とても大胆かつ繊細で、曲をはっきりと把握し、自分の情緒の世界まで引き上げ、東洋的な神秘性、流動性をよく発揮した。私は高く評価している。」と絶賛された。  
1992年9月、コリアンシンフォニーオーケストラを指揮してニューヨーク・カーネギーホールでアメリカデビューを果たし、成功をおさめた。  
これまでに、NHK教育、衛星、FMコンサート(新日フィル、東フィル、他)に多数出演し、また録音においても東芝EMI、キングレコードなどからもCDが発売されている。  
現在、最も期待される指揮者の一人であり、内外のオーケストラの定期演奏会、特別コンサートなどに多数出演し多忙な活動を展開している。



志岐由理子 (しき ゆりこ)  
ソプラノ



熊本音楽短期大学研究科修了。第29回西日本新人音楽コンクールにてグランプリ受賞。第22回熊本県新人演奏会出演。86年イタリア・ミラノ留学。オペラ歌唱法をA・シリオッティ、佐久間信一の諸氏に師事する。帰国後、記念リサイタルを開催。89年、サマーオペラ「道化師」の主演ネッダでオペラデビュー。その後、オペラ「椿姫」「蝶々夫人」「ラ・ボエーム」「リゴレット」「カヴァレリア・ルスティカーナ」の各公演の主演ソプラノとして出演。歌唱、演技、その他全般にわたり当オペラのプリマドンナ・ソプラノとして好評を博す。

91年、熊本市第1回人づくり基金からの助成を得て、再度イタリア・ミラノ市に渡り、イタリアオペラ歌曲等の研鑽を積む。

93年にはイタリアでの日伊親善演奏会に招かれる。

94年韓国釜山市にてジョイントリサイタルに客演する。又、県芸術祭参加リサイタルの他、各種コンサート活動なども精力的に行う。

熊本シティ・オペラ10周年記念公演オペラ「運命の力」の主演「レオノーラ」で出演。又イタリア公演に参加。創作喜歌劇「かっぱの河太郎」の主演「女狐」を好演する。

現在：二期会会員、日本演奏連盟会員、熊本学園大学短期部講師、九州音楽芸術専門学校講師、コール東部ヴォイストレーナー、熊本シティ・オペラ合唱団指導者、熊本シティ・オペラ会員

妻鳥 純子 (めんどり すみこ)  
アルト



大分県立芸術短期大学卒業。東京芸術大学音楽科卒業、同大学院修了。

第42回日本音楽コンクール第3位、海外派遣コンクール松下賞受賞。

ミュンヘン音楽大学に留学。藤原武、首藤迪子、ロドルフォ・リッチ、中山悌一、フランツ・ミクサ、ヘルタ・テッパー、エレナ・オブラッツォヴァの諸氏に師事。

オペラでは「カルメン」「フィガロの結婚」「修道女アンジェリカ」「ヴァニキューレ」「神々の黄昏」「椿姫」「ジャンニ・スキッキ」「春琴抄」「祝い歌が流れる夜」他に出演。又、「マニフィカート」「口短調ミサ」「メサイア」「レクイエム」「ミサ・ソレムニス」「第九」「復活」等のコンサートに出演する一方、ドイツリートを中心にしたプログラムでリサイタルを行っている。

'92年、'95年に宮本曲門演出の東宝ミュージカル「サウンド・オブ・ミュージック」に修道院長の役で出演。好評を得る。'96年より友人5人とグループ「Funf Musikanten」（5人の音楽愛好家）を結成し、ブラームス、シューマン、シューベルト他の「歌曲と重唱の夕べ」の音楽会を開催し大変好評を得ている。

現在、玉川大学、武蔵野音楽大学講師 二期会会員 フーゲー・ヴォルフ協会同人

牧川 修一 (まきかわ しゅういち)  
テノール



武蔵野音楽大学音楽科を卒業。

宮原卓也、鈴木寛一、疋田生次郎の諸氏に師事。

ジュネス音楽祭にヴェルディ「レクイエム」(NHKホール、尾高忠明指揮)のテノールソロを歌ってデビュー。以後主に宗教曲のソリストとして活動、数多くの内外の著名な指揮者と協演している。

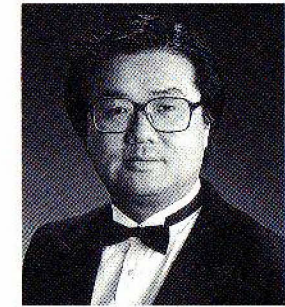
また、プリテン「中国の歌」、ヘンデル「サウル」、ベルト「ヨハネ受難曲」、リムスキーコルサコフ「モーツァルトとサリエリ」等の日本初演も行い、1975年NHK古典班制作「天地創門」ではテノールソロを歌い芸術祭奨励賞を受賞した。

近年はオペラ出演も多く、「ヘンゼルとグレーテル」の魔女、「カルメン」のレメンダート、「運命の力」のトラブーコ、「蝶々夫人」のゴロー、「後宮からの逃走」のペドリロ、「ラインの黄金」のミーメ、「フィガロの結婚」のパジエリオ、クルツィオ、「コジ・ファン・トゥッテ」のフェランド、「愛の妙薬」のネモリーノ等をはじめ個性的演技、歌唱を要求される役の分野で、特に紙面等でも度々高い評価を得ている。1990年には二期会オペラ「蝶々夫人」のゴロー、三木稔作曲「春琴抄」の真平役でフィンランドのサヴォンリンナ音楽祭に出演した。

1980年より1年半ローマサンタチェチーリア音楽院に留学、声楽をヨランダ・マニョーニ、オペラ演技をマルチェラ・ゴウォーニ両女史に師事して研鑽を積んだ。また1993年度文化庁在外研修員として、ローマ、ミラノで研修。

現在二期会会員、二期会オペラスタジオ講師、桐朋学園大学非常勤講師。

小川 裕二 (おがわ ゆうじ)  
バリトン



東京芸術大学音楽科および同大学オペラ科修了。

日伊声楽コンクール第2位受賞、日本音楽コンクール入選。

NHK洋楽オーディション合格。

石津憲一、柴田睦陸、ニコラ・ルッチ、疋田生次郎、高橋大海の各氏に師事。

芸大オペラ「ラ・ボエーム」のマルチェロ役でオペラ・デビューし、その後多数のオペラやコンサートに出演し、研鑽を積んだ。

明るい叙情的なハイ・バリトンで「カルメン」のエスカミーリョ、「道化師」のシルヴィオ、トニオ、「蝶々夫人」のシャープレス等バリトンの主要な役を歌っているが、特に二期会公演「椿姫」のジョルジョ・ジェルモン役や、東京オペラ・プロデュース公演「ラ・ボエーム」のマルチェロ役で好評を得、また、東京オペラ・プロデュース公演「トスカ」のスカルピア男爵役を演じ、絶賛を浴びた。

1982年には、東京室内歌劇場の一員として『イスラエル・フェスティバル』に参加。また、1990年には、二期会のフィンランド『サヴォンリンナ・オペラ・フェスティバル』参加公演「お蝶夫人」にも出演した。

ベートーヴェンの「第九」をはじめ、多くの宗教曲や、オーケストラのコンサートにも数多く出演している。

また、リサイタルやジョイント・リサイタルにも、意欲的に取り組んでいる。

現在、國學院大学栃木短期大学助教授。二期会会員。



1. 序曲「コリオラン」ハ短調 作品62

ベートーヴェン

2. 交響曲第9番 二短調 作品125「合唱付き」

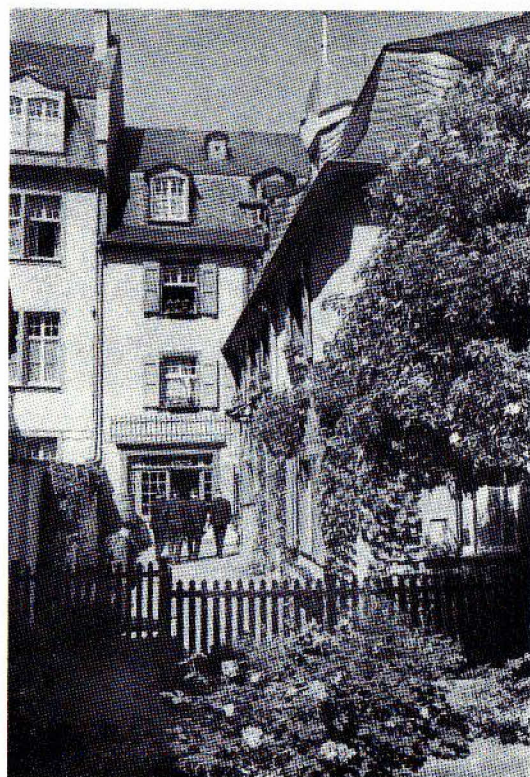
ベートーヴェン

第1楽章 Allegro ma non troppo, un poco maestoso

第2楽章 Molto vivace

第3楽章 Adagio molto e cantabile

第4楽章 FINALE

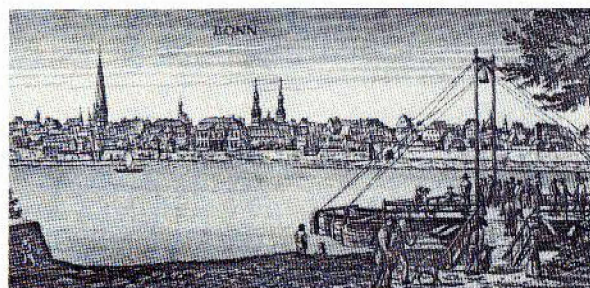


ベートーヴェンの生家（ボン）

ベートーヴェンは1770年12月16日、ドイツのボンで生まれた。1970年にはベートーヴェンの生誕200年を記念した様々な催しが全世界で行われた。

ボンで行われた“第九”の演奏会には日本からもある大学の合唱団が参加した。その演奏会の模様がラジオで中継されると、ボン中の人々は自分の家のラジオのボリュームを一ぱいに上げて、窓辺に外へ向かってそのラジオを置いたという。

ボン中にベートーヴェンの“第九”が鳴り響く様子は、実に壮観で感動的であったに違いない。同時に、ボンの人々のベートーヴェンを誇りに思う気持ちと愛する気持ちが手にとるようになる。



ライン河の埠場から眺める対岸のボン市全景 1800年頃

■シラー《歓喜に寄す》

対訳＝大宮 真琴

バリトン独唱

O Freunde, nicht diese Töne! sondern  
lasst uns angenehmere anstimmen, und  
freudenvollere.

おお、友よ、この調ではなく、  
さらに快い、さらに歓びに満ちた調べを  
ともに歌おう!

バリトン独唱・合唱

Freude, schöner Götterfunken,  
Tochter aus Elysium.  
Wir betreten feuer-trunken,  
Himmliche, dein Heiligtum!  
Deine Zauber binden wieder,  
Was die Mode streng geteilt;  
Alle Menschen werden Brüder,  
Wo dein sanfter Flügel weilt,

①歓びよ、神々のうるわしい輝きよ!  
楽園の娘らよ!  
われらみな、感動に酔い、  
天の高みの神殿に踏み入ろう!  
②この世に厳しく引き離された者らを、  
神秘なる御身の力は、再び結び合わせる。  
御身の優しい翼の憩うところ、  
すべての者らは、同朋（はらから）となる。

四重唱・合唱

Wem der grosse Wurf gelungen,  
Eines Freundes Freund zu sein,  
Wer ein holdes Weib errungen,  
Mische seinen Jubel ein!  
Ja, Wer auch nur eine Seele  
Sein nennt auf dem Erdenrund!  
Und wer's nie gekonnt, der stehle  
Weinend sich aus diesem Bund!

③大いなる天の賜物をうけた者らよ、  
真空の友情をかり得た者らよ、  
女の優しい愛を得た者らよ、  
歓びの歌を、ともに歌え!  
④しかり、たとえ、ただ一人の魂でさえも  
地上の友と呼べる者を持つことができるならば!  
だが、それさえ持つことのできなかった者は、  
涙しつつ、足音をしのばせ、立ち去るがよい!

四重唱・合唱

Freude trinken alle Wesen  
An den Brüsten der Natur;  
Alle Guten, alle Bösen  
Folgen ihrer Rosenspur.  
Küsse gab sie uns und Reben,  
Eien Freund, geprüft im Tod;  
Wollust ward dem Wurm gegeben,  
Und der Cherub steht vor Gott.

⑤すべてこの世に在るものら、  
自然の胸から歓びを飲み、  
すべての善人も、すべての悪人も、  
歓びの薔薇の小径を行く。  
⑥歓びは、われらに、口づけと葡萄酒と、  
そして、死さえも奪い去ることのできぬ友とをあたえ、  
虫けらにさえも楽しみがあたえられ、  
天使ケルビムは、神の御前に立つ。

テノール独唱・男声合唱

Froh, wie seine Sonnen fliegen  
Durch des Himmels prächt'gen Plan,  
Laufet, Brüder, eure Bahn,  
Freudig, wie ein Held zum Siegen.

⑦歓びよ、歓びよ、神の太陽たちが、  
壮大な天の軌道をたのしく飛びかうように、  
⑧同朋（はらから）よ、おのれの道をすすめ、  
歓びに満ちて、英雄が勝利の道をすすむがごとくに。

合唱

Seid umschlungen Millionen!  
Diesen Kuss der ganzen Welt!  
Brüder über'm Sternenzelt  
Muss ein lieber Vater wohnen.  
Ihr stürzt nieder, Millionen?  
Ahnest du den Schöpfer, Welt?  
Such'ihn über'm Sternenzelt!  
Über Sternen muss er wohnen.

⑨たがいに手を取り合おう、億万の人々よ!  
この口づけを、全世界にあたえよう!  
同朋（はらから）よ、星のかなたには、  
愛する一人の御父が住み給うのだ。  
⑩ひれ伏して祈るか?億万の人々よ。  
創り主を心に感ずるか?世界の民よ。  
星空のかなたに、主をさがし求めよう!  
星たちのうえに、主は住み給うのだ!



## 1. 序曲「コロオラン」八短調 作品62 ベートーヴェン

コロオランは、紀元前5世紀ごろのローマの英雄である。紀元前494年にローマが共和政体になるに及んで、政治上の意見の相違により、コロオランは、国外追放となる。2年後隣国ヴォルシアの将軍となったコロオランは、大軍をひきいて故国ローマを攻める。しかし、城門まで迫ったコロオランは、かれの母ヴォーラムニアと妻ヴァージリアの諫言により、ついにヴォルシア軍に反旗をひるがえし、再びローマ側につく。けれどその結果は謀殺されることになるのである。

ベートーヴェンが序曲「コロオラン」を作曲したのは、1802年、ベートーヴェンと親しい関係にあり、当時ウィーンの宮廷秘書官で詩人のハインリヒ・ヨーゼフ・コリンの戯曲「コロオラン」の上演が直接の動機となっている。

ただし、序曲「コロオラン」が作曲されたのは1807年であるため、この戯曲の上演のために作曲されたものではない。

ベートーヴェンは、かれの唯一のオペラ「フィデリオ」のために序曲を4曲も書いている。その他の序曲は殆どが劇音楽のものや、バレエ音楽等の序曲である中で、この序曲「コロオラン」だけは全くの独立した序曲である。

曲は、八短調というベートーヴェンにとっては、宿命的といえる調性で書かれ、その性格は劇的な内容をもっている。ソナタ形式の第一主題は、音程の上行、下行を繰り返しながら発展するというベートーヴェンのモチーフ作法を採る。これはコロオランの高慢で情熱的な性格を表している。また、優しい第二主題には、その母と妻の姿が描かれ、この2つの主題は見事な対照を見せている。



「第九」の初演でアルトをうたったカロリーネ・ウンガー

## 2. 交響曲第9番二短調作品125「合唱付き」 ベートーヴェン

ベートーヴェンは、一つ一つが内容と性格を異にする八つの交響曲を書き終えたのち、生涯の最後に、九番目の交響曲に着手した。

1793年に、ポンのフィッシェニヒは、シラー夫人に手紙で「彼は歓喜をも、しかも各節残らず作曲するでしょう……」と告げていることにより、ベートーヴェンは生地ボンにいたときから、すでにシラーの詩「歓喜に寄す」に作曲したいと思っていたことがわかる。

1822年に、ロンドンのフィルハーモニー協会は、ベートーヴェンに新しい交響曲の作曲を依頼してきた。このことで、今までベートーヴェンの頭の中に、うかんだり、消えたりしていた合唱付きの交響曲の構想が、いっきよに実現することになった。そして1823年から24年にかけて、この巨大な交響曲が完成した。シラーの「歓喜に寄す」に作曲する意図をいだいて、完成するまでに、じつに30数年にわたっていることになる。

この曲は、ベートーヴェンの音楽における技法と精神の最も円熟した時代の作品であって、その内容が雄大な精神と、大胆にして洗練され、全く独創に富んだもので、いく多の目新しい技法がそこに示され、その楽想は当時の常識を全く超えたものであった。四人の独唱者や大規模な合唱団を用いたり、終曲の初めにおいて、前の三つの楽章を回想したりなどはその一例である。

初演は1824年5月7日夜、ウィーンのケルントナート劇場で行われた。

ベートーヴェンの聴力がかなり衰えていたことは、この曲の初演の際に、指揮者を二人おいたことでもわかる。ベートーヴェンは正指揮者のウムラウフの隣りにあって、実際の演奏とは、いく違ったテンポや表情で空しく空間に弧を描くのみであったという。

「第九」の演奏は練習不足ではあったが、聴衆には偉大な感銘を与え、各楽章の終りには万雷の如き拍手が起った。特に終曲が終ったとき、成功は決定的となった。満堂の聴衆は感激して総立ちとなり喝采を浴びた。しかし、耳の聞こえないベートーヴェンは聴衆を背にしてボンヤリしていた。見かねたアルトの独唱者ウンガーがかれの袖をひいて聴衆の方を向けたので、かれは初めてこの曲が非常な感銘を与えたことを知り、礼をしたという。聴衆はこの劇的な悲愴な光景に感激し、さらに拍手を続けて、作曲者を五度も答礼のためにステージに出させた。答礼は三回というのが皇帝に対する礼儀なので、警官があわてて聴衆を制したという。

### 【第一楽章】 Allegro ma non troppo, un poco maestoso

「第九」の規模の雄大さと、劇的な性格は、はやくもこの楽章でも示されている。導入は、天地の混沌を想わせる茫漠とした空5度（第三音がない）の響きで始まる。やがてこの響きのなかから鋭いリズム・モチーフが生起する。このモチーフが圧縮され、第1主題が澎湃（ほうはい）として沸き起こる巨大な魂のごとく聳然（しょうぜん）たる姿をあらわす。ソナタ形式は、いまだかつて、このような主題を経験したことがなかったのである。

第2主題は第1主題と異なっており、楽しい性格のものである。これにつづく部分も、大体においてこの気分をもち、ときどき第1主題の部分をまじえながら展開部へとつづく。そしてその劇的壮大さは再現部における第1主題へ壮烈な導入において、クライマックスに達する。

ワーグナーによると「我々と地上の幸福との間をさえぎる敵意ある暴力の圧迫に対して、喜びをから得ようと努める魂の戦い、極めて壮大な意識で把握された戦いが、この第一楽章の基礎をなしているように思える」である。

### 【第二章】 Molto vivace

およそベートーヴェンの書いたスケルツォのなかで、最も大規模なものである。鋭い付点リズムを含む、むしろ単純なスケルツォ楽想が、およそ考えるうる限りのすべての展開を行う。トリオの主題はあきらかに第一楽章のエピソードから受けつがれたものであり、終楽章の「歓喜の調べ」への橋わたしの役を果たすことにもなるのである。

ワーグナーは「激しい喜びが、この第二楽章のはじめのリズムで直ちに我々をとらえる。新しい世界の中に我々はいり、そこで陶醉や麻醉へと駆りたてられるからである…」と言っている。

### 【第三楽章】 Adagio molto e cantabile

讃歌ふうの主題旋律と希望と浄化を象徴する

ような明るく美しい第二主題、この両主題にもづく自由な変奏形式をとっており、叙情的な旋律、色彩的な和声は、宗教的な敬虔さをもって瞑想的に展開され、情熱も闘争もない平和な幸福感が描き出される。

この交響曲の中での一つの頂点であり、ワーグナーは「なんと清らかに天国のようななだめ方でそれ等の音は反抗と絶望におののいた魂のはげしい促しを、やわらかい憂鬱（ゆううつ）な感覚へと溶けさせていくことが、思い出がごとくに享受したきわめて純粋な幸福への思い出が目ざめるかのように思われる…」と言っている。

### 【第四楽章】 Finale

第1呈示部＝まず管楽器によるあわただしい楽想が奏される。これに対し低弦がレシタティブでこたえる。それから、前の三つの楽章がそれぞれ回想され、低弦のレシタティブによって否定されていく。そしてついに、一つの歓ばしい旋律が現われる。この主題は初めに低弦によって歌われ、くり返しながらかつて全奏に至る。

第2呈示部＝この楽章の初めの、あわただしい楽想がもどってくる。やがてバリトン独唱が、力強く歌いはじめ、ついで合唱がそれにつづく、やがて他の独唱も加わり、ひとつのクライマックスをつくる。曲想一転して行進曲となり、テノール独唱が歌いはじめる。そして男声合唱が、力強く歌いくわわる。

再現部＝やがて曲はふたたび「歓喜の調べ」がもどり、合唱が重々しく新しい主題をうたう。やがてこの新しい主題と「歓喜の調べ」とが組み合わせられて、壮麗な二重フーガがくりひろげられ、全曲中のひとつのクライマックスを形づくる。

コーダ＝曲想が一変する。主題旋律の新しい変奏に入り、四人の独唱者と合唱が変化のかぎりをつくして、交互に歌いすすめる。

圧倒的な合唱コーダとなり、合唱の最後は、マエストロとなるが、管弦楽だけが残り、圧倒的な終結を一気に終る。

### 「熊本県民第九の会」実行委員会

顧問	有馬俊一	委員	神田一伸	黒葛原	潔
	下田幸城		草刈秀克	藤本	幸弘
委員長	林原隆治		草刈秀士	松岡	聡
			坂口幸男	本山	洋
			田北洋康	山崎	崇伸







熊本交響楽団  
KUMAMOTO SYMPHONY  
ORCHESTRA

熊本県民第九の会演奏会記録  
※は同時演奏曲

〈コンサートマスター〉	高木 信雄	三浦 純子	〈ファゴット〉
大宮 伸二	黒葛原 洋子	右田 晴久	小田 穂積
	野原 万友美	山中 朗史	小林 太郎
	東 眞知子		高木 群之
〈1stヴァイオリン〉	古屋 弓子		星出 和裕
内田 衣伊子	本山 洋	〈コントラバス〉	
大宮 伸二	柚原 三弥子	東 康二	
桂 敦子		古泉 俊彦	〈ホルン〉
古泉 晃子	〈ヴィオラ〉	国米 稔	伊藤 友美
陶山 典明	安倍 和歌葉	重田 まゆみ	小島 充
高松 江三子	上野 久美	白木 信一郎	田中 禎子
龍野 珠美	緒方 進	田上 博子	外村 真実子
黒葛原 契子	緒方 肇	歳田 和彦	山口 亮二
鶴 和美	北澤 孝治	中川 裕司	渡辺 由美
豊田 絢子	清元 晃	平川 和秀	
長坂 浩子	甲田 啓子		〈トランペット〉
中山 文子	土井 智広		中野 崇之
松岡 千平	黒葛原 潔	〈フルート〉	永廣 正治
原 雅子	徳永 義治	相沢 久美子	堀江 幸司
山下 史	中村 衣井子	今村 ナオミ	
	水田 剛	外岡 紀子	
〈2ndヴァイオリン〉	山崎 崇伸		〈トロンボーン〉
熱田 聡	吉田 美智子		是松 幸二郎
井上 朋子		〈オーボエ〉	寺本 昌弘
岩下 史		片岡 久哉	古澤 浩幸
上野 暢子	〈チェロ〉	小林 美絵	
浦上 郁子	石垣 博志	辰野 裕昭	
岡 純子	大堀 純一郎	吉田 千草	
北山 尚子	樋田 博文		〈打楽器〉
清田 みずほ	野島 秀司		上野 心き子
小柳 敦子	福永 憲包	〈クラリネット〉	白尾 友宏
坂下 真弓	佛淵 かつよ	黒木 健次	唯野 佳香
迫田 美和	佛淵 信夫	原 敏郎	早川 武志
佐藤 弘美	本田 義信	府高明子	
園村 明美	松永 尚子	前野 美千代	

第1回	昭和57年12月28日(火)	指揮 山田 一雄 独唱 新 圭子 木村 宏子 伊津野 修 高橋 修一 ※越 天 楽(雅楽)……………近 衛 秀 磨(編曲)
第2回	昭和58年12月11日(日)	指揮 大友 直人 独唱 高見久美子 岡 ますみ 大野 光彦 柴田 啓介 ※歌劇「ニュルンベルグのマイスタージンガー」前奏曲……………ワーグナー
第3回	昭和59年12月27日(木)	指揮 山岡 重信 独唱 中沢 桂 木村 宏子 板橋 勝 池田 直樹 ※弦楽のためのアダージョ 作品11……………バーバー
第4回	昭和60年12月25日(木)	指揮 フランティシエック・ワイナル 独唱 三縄みどり 妻鳥 純子 伊達 英二 中村 邦男 ※「レオノーレ」序曲第3番 作品72……………ベートーヴェン
第5回	昭和61年12月27日(火)	指揮 荒谷 俊治 独唱 津下美奈子 木村 宏子 鈴木 寛一 芳野 康夫 ※トッカータとフーガ 二短調……………バッハ〜ストコフスキー
第6回	昭和62年12月26日(土)	指揮 安永武一郎 独唱 中沢 桂 木村 宏子 近藤 伸政 栗林 義信 ※「エグモント」序曲 作品84……………ベートーヴェン
第7回	昭和63年12月25日(日)	指揮 安永武一郎 独唱 三縄みどり 木村 宏子 鈴木 寛一 平野 忠彦 ※序曲「コリアン」ハ短調 作品62……………ベートーヴェン
第8回	平成元年12月24日(日)	指揮 小松 一彦 独唱 秋山恵美子 木村 宏子 成田 勝美 高橋 啓三 ※「プロメテウスの創造物」序曲 作品43……………ベートーヴェン
第9回	平成2年12月23日(日)	指揮 粉山 和明 独唱 山田 綾子 木村 宏子 大野 徹也 福島 明也 ※「ロザムンデ」序曲 作品26 D797……………シューベルト
第10回	平成3年12月23日(月)	指揮 安永武一郎 独唱 西森 由美 木村 宏子 田中 誠 宮原 昭吾 ※「エグモント」序曲 作品84……………ベートーヴェン
第11回	平成5年12月23日(木)	指揮 荒谷 俊治 独唱 河添富士子 春日 成子 小林 彰英 栗林 義信 ※歌劇「ニュルンベルグのマイスタージンガー」前奏曲……………ワーグナー
第12回	平成6年12月25日(日)	指揮 金 洪才 独唱 岩永 圭子 妻鳥 純子 櫻庭 知昭 勝部 太 ※「エグモント」序曲 作品84……………ベートーヴェン
第13回	平成7年12月24日(日)	指揮 金 洪才 独唱 西森 由美 妻鳥 純子 大島 博 大島 幾雄 ※モテット「アヴェ・ヴェルム・コルプス」k. 618……………モーツァルト
第14回	平成8年12月23日(月)	指揮 本名 徹二 独唱 河添富士子 妻鳥 純子 大間知 寛 瀬戸口 浩 ※カンタータ第147番よりコラール「主よ、人の望みの喜びよ」BWV147……………J.S.バッハ